



ASIAN AND MIDDLE EASTERN STUDIES TRIPOS Part IB

Japanese Studies

---

---

**J.5 MODERN JAPANESE TEXTS 2**

Answer **BOTH** sections

Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Answer Book.

**STATIONERY REQUIREMENTS**

*20 Page Answer Book x 1*  
*Rough Work Pad*

**SPECIAL REQUIREMENTS**

*none*

**You may not start to read the questions  
printed on the subsequent pages of this  
question paper until instructed that you may  
do so by the Invigilator.**

## SECTION A

1 Translate the following passage from an unseen text into English. [40 marks]

それは一生一度の、告白だった。

本当は、初めて会った時からミノさんが好きだった。ずっと好きで、だからずっと苦しかった。たぶん私は本能的に、自分と同じ苦しみをミノさんの中に見て取っていたのだ。

彼と会い、話をするうちに、ミノさんがこの世界には伴侶を求めていることを知ってしまった。お節介なバーテンダーが、あの人ちょっとヘンなんだとも教えてくれた。そして彼自身よく言っていた。自分が独身を通して、母親には辛い思いをさせている、それが申し訳ない、と。

偽装結婚の話の切り出したのは、だから小さな賭だった。その頃には、理解しきれない部分も含めたミノさんが好きになっていた。彼はいわば、カレンダー機能の狂った時計だった。それは時計としては大して問題じゃない。カレンダー機能なんて、さほど必要なものでもない。むしろ、私の中の同じ機能を意図的にずらしてしまえばいい。それで万事、うまく行く。

嘘をつき通す自信はあった。私が偽りの結婚をするのは、いじましい虚栄心のため。それでよかった。

私の計画に、ミノさんはいともやすやすと乗ってきた。こちらが当惑してしまうくらい、呆気なかった。彼を欺あきいているということが後ろめたくて、ぐずぐずと乗り気でない振りさえした。そして心の中では、飛び上がりたほどに嬉しかった。

KANŌ TOMOKO, *Monorēru neko* (2009), p. 162.

告白 confession; 伴侶 partner; お節介 meddling, nosey;  
偽装 fake; 賭 gamble; ずらす alter; いじましい虚栄心 petty vanity;  
呆気ない too quick; 欺く deceive

## SECTION B

Translate **two** of the following passages from seen texts into **English**: [30 marks each]

2

これは清兵衛という子供と瓢箪との話である。この出来事以来清兵衛と瓢箪とは縁が断れてしまったが、まもなく清兵衛には瓢箪に代わる物ができた。それは絵を描くことで、彼はかつて瓢箪に熱中したように今はそれに熱中している……

清兵衛が時々瓢箪を買って来ることは両親も知っていた。三四銭から十五銭ぐらまでの皮つきの瓢箪を十ほども持っていたろう。彼はその口を切ることも種を出すこともひとりで上手にやった。栓も自分で作った。最初茶洗で臭味をぬくと、それから父の飲みあました酒を貯えておいて、それでしきりに磨いていた。

全く清兵衛の癡りようは烈しかった。ある日彼はやはり瓢箪のことを考え考え浜通りを歩いていると、ふと、眼に入った物がある。彼ははっとした。それは路端に浜を背にしてズラリと並んだ屋台店の一つから飛び出して

来た爺さんの禿頭であった。清兵衛はそれを瓢箪だと思っただのである。「立派な瓢箪じゃ」こう思いながら彼はしばらく気がつかずにいた。——気がついて、さすがに自分で驚いた。その爺さんはいいい色をした禿頭を振り立てて彼方の横町へ入って行った。清兵衛は急におかしくなって一人大きな声を出して笑った。たまたまなくなって笑いながら彼は半町ほど馳けた。それでもまだ笑いは止まらなかった。

これほどの癡りようだったから、彼は町を歩いていれば骨董屋でも八百屋でも荒物屋でも駄菓子屋でもまた専門にそれを売る家でも、およそ瓢箪を下げた店といえは必ずその前に立ってじっと見た。

清兵衛は十二歳でまだ小学校に通っている。彼は学校から帰って来ると他の子供とも遊ばずに、一人よく町へ瓢箪を見に出かけた。そして、夜は茶の間の隅に胡坐をかいて瓢箪の手入れをしていた。手入れが済むと酒を入れて、手拭いで巻いて、罐にしまって、それごと炬燵へ入れて、そして寝た。翌朝は起きるとすぐ彼は罐を開けて見る。瓢箪の肌はすっかり汗をかいている。彼は厭かずそれを眺めた。それから町端に糸をかけて陽のあたる軒へ下げ、そして学校へ出かけて行った。

SHIGA NAOYA, 'Seibei to hyōtan', *Nihon no bungaku* 22, p. 150.

(TURN OVER)

テッドという名のこのペンキ屋は、王室御用達の完璧な技術の持ち主である。西洋人にとって、ペンキ塗りというのはだれもがやるごく当たり前の作業である。ところがテッドの仕事ぶりと技術は、目をみはらせるほど完璧で美しく、他のペンキ屋との差がはっきりわかるのである。

あるときスコット氏は、このテッドに向かって、門前の公共の街灯（英語でランプポストという）まできれいに塗れと命じたので、さすがに使用人一同は陰で笑ってしまった。このペンキ屋のほかにはプラマー（配管工）と電気屋がしょっちゅうやってくる。屋敷中の設備を点検し、常にすべてを完璧に整えておくのである。さらに牛乳屋、クリーニング屋、これも王室御用達で、シーツなどはもう完璧に洗ってプレスされていなければならぬというわけだ。

スコット氏は他の英国人同様、「家は城だ」という考えの持ち主で、家にはとことんこだわるが、着る物には無頓着だ。清潔なものを着ていればいいという主義で、夏はTシャツと木綿のズボン、冬はセーターとコートという服装で過ごしている。おそらく、ハリウッドの自宅には揃えてあるのだろうけれど、ロンドンの屋敷にはタキシードひとつない。

彼は私のアイロン掛けしたシャツが好みで、街のクリーニング店の洗濯やプレスの技

3 (continued)

術をまったく信用していない。ケイコのアイロン掛けしたものは着やすいといってくるのだ。息子二人も同様で、おまけに私はアイロン掛けが大好きときている。

私は生まれてこのかた、母がアイロンを掛けているのを見たことがない。これはもっぱら父の仕事だった。そんなわけで、私はアイロンの正しい掛け方を知らずに成長した。そして二十四歳のとき、大阪の夙川しゆくがわのスイス人の家でメイドになった折に、アイロン掛けができなくて、通いのおばさんにさんざんいじめられた。だが、そこで正しいアイロンの掛け方を学んだおかげで、こうしていま、外国で仕事ができるというわけである。

さて、スコット家のハウスキーパーとしての私の一日だが、スコット氏が在宅しているときは、朝、七時二十分に起床する。パタパタと大急ぎで歯を磨き、顔を洗い、着換え、六階から飛ぶように一階のキッチンへ。そうそう、その手前で警報装置を解除しなければならぬ。そして、その日が月曜日ならばゴミを出すことも忘れてはいけぬ。それから赤チンのドアを開け、電気ポットに水を入れ、スイッチを入れる。お湯の沸く間、丸い茶色のライ麦パンを切り、アーガと呼ばれる英国式かまどの鉄の台に載せた丸い網で、トーストを作る。お湯が沸くと、挽いたコーヒーをパーコレーターに入れ、お湯をそそぐ。

4

2012年12月3日(月)付

憂うべきか、当たり前と思うべきか、ある本によれば、外交では最後に軍事力がモノを言うというのが国際政治のイロハらしい。次に経済力だそうだが、そればかりではなく国際世論というのがある。どんな国もこれを敵に回したくない▼その国際世論が、武力も経済力もないパレスチナを後押しした。国連総会が先日、パレスチナの参加資格を、オブザーバーながら「国家」に格上げした。賛成138、反対9、棄権41は圧倒的な支持といえる。対立するイスラエルと、後ろ盾の米国には厳しい結果だ▼ふと浮かんだのが、戦前の日本をめぐるリットン報告書の国際連盟採択だった。満州国の不承認に日本だけが反対した決議は42対1。たとえるなら、それぐらい明らかな「世界の声」に思われる▼同じ国連でも、安保理は米英仏中ロが牛耳って、決議は大国の拒否権に左右される。だが総会ほどの国も等しく一票を持つ。血で血を洗う情勢に多くの国が心を痛めている。ちなみに日本は賛成を投じて、米国とは一線を画した▼決議への報復に、イスラエルは占領地に3千戸の入植住宅の建設を決めたという。これは国際法に反するが、強面(こわもて)の国は頑(かたく)なさを崩そうとしない▼パレスチナの名高い詩人が「愛の詩でさえ、ここでは抵抗の詩になってしまう」と言って嘆いた悲劇の地に、和平が灯(とも)る見通しはまだない。その剣を鋤(すき)にうち変え、その槍(やり)を鎌に変える——旧約聖書の言葉に立ち戻っての和解と共存は、かなわないものか。

2012年12月4日(火)付

アルプス最高峰、モンブランのトンネルを車で走ったことがある。約4千円の通行料より、時速50~70キロ、車間150メートルという厳格な規制にたまげたものだ。1999年の火災事故(死者39人)の教訓と聞いた▼フランスとイタリアを結ぶ細穴は、12キロ弱の対面通行である。高速道から入るとノロノロ運転の感覚で、遠くのテールランプをにらんでの10分が長い。閉所に弱い当方、名峰の胎内に限らず、トンネル内ではあらぬ悪夢が胸をよぎるのが常だが、頭上を案じたことはついぞなかった▼中央自動車道笹子(ささご)トンネルの天井崩落は、3台を巻き込み、9人が亡くなる惨事となった。130メートルにわたり300枚ものコンクリート板が落ちる、前例のない事故である▼崩れたのは全長の3%。7秒で抜けられる距離で、ひと息の差が生と死を分けた。前触れもなく、前途を絶たれた人の絶望に胸が詰まる。渋滞していたらと思うと、なお恐ろしい▼…

'Tensei jingo', *Asahi Shinbun* digital edition, 3rd December and 4th December, 2012.

END OF PAPER